泥田坊

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
泥田坊

【Ｎコード】
Ｎ５０３０Ｉ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
賢作は子供達の為にせっせと田畑を耕していた。しかし彼の死後子供達はその田畑を売ろうとする。すると田畑から。現代日本の妖怪ものです。

第一章

泥田坊

泉賢作は働き者だった。いつも自分の田や畑を耕し手入れをしていた。

その為彼の家の田も畑も見事なものだった。彼はいつもその田畑を見て言うのだった。

「この田畑は先祖代々のものだからな」

「賢作さんいつもそう言うね」

「当たり前だよ」

こう近所の村人達にも言うのだった。それも誇らしげに。

「この田畑はわしの命だよ」

「命かい」

「そうさ。これはずっと残していくからな」

こうも言うのだった。

「子孫にもな」

「おやおや、大きく出たね」

「子孫に美田を残すってわけか」

「そうさ」

胸を張っての言葉だった。西郷隆盛の言葉を正反対にしたものだった。

その言葉をあえて言いながらその田畑を見るのだった。しかしそんな彼を見て子供達は苦い顔をするのだった。

「今更そんな田畑なんて持っても」

「全くだよ」

「何の意味もないよ」

こう言うのだった。

「親父はああ言うけれど俺もう大阪にいるからな」

「俺だってお役所に入ったし」

「私は街のデパートに勤めてるし」
「私だって旦那が駅員さんだし」
誰も畑仕事とは離れているのだった。だから彼がいい田畑を持っていてもそれを有り難いどころか迷惑にさえ思っているのだった。
「どうする？」
「どうするって？」
「だから。あれよ」
そのうえでいつも顔を合わせると眉を顰めさせて話をするのだった。
「親父が死んだら。あの田畑をな」
「売るのか？」
「売るしかないでしょう」
「そうよ」
そのうえでこう話すのだった。彼等にしてみれば耕すことなぞできないからこう考えるのは当然のことだった。あくまで彼等はこう言うのだった。
「お父さんが死んだらもう」
「それで売って」
「そうするしかないでしょ」
「そうだよな」
そして彼等の誰もそれに反対しないのだった。むしろ積極的に賛成している面子が殆どだった。
「俺もそんなの無理だし」
「俺も」
「私も。絶対に無理」
「私もなのよね」
父である賢作には決して聞こえないようにしていつもこんな話をしていた。そんな話をしているうちに歳月が流れ賢作はある日畑仕事をしている時に倒れてしまった。彼が倒れているとその近所の村人が見つけて慌てて救急車を呼んだのである。

すぐに息子や娘達が集められた。だがもう賢作は手遅れだった。
「えっ、そんなに重い病気だったのか」
「何時の間に」
「というか誰も御存知なかったのですか？」
医者は賢作の病状を聞いて驚いた顔になる彼等に対して告げた。
「誰も」
「そんな。親父が癌だったなんて」
「そんなことは」
「誰も知らなかったわ」
皆困惑した顔で医者にこう述べるのだった。
「大体今まで畑仕事していたのに」
「それが急に倒れて癌って」
「有り得ないわよ」
「ですが現実に癌なのです」
医者は難しい顔でまた彼等に告げた。
「それももう」
「手遅れなのですか」
「そんな・・・・・・」
確かに田畑はいらないと思っていたが父親としては別だった。彼等も彼等なりに自分の父親を深く愛していたのである。子供として。
「後は。静かに過ごさせて下さい」
医者の言葉は最後通牒であった。
「もう」
「はい・・・・・・」
「わかりました」
最早医者のその言葉に頷くしかなかった。
「じゃあ後は」
「私達で」
賢作はそのまま入院し暫くして子供達を枕元に呼んだ。そうして小さくはなっているが確かな声でこう彼等に対して告げたのだった。

第二章

「あの田畑はな」
「ああ、親父」
「あの田畑ね」
「決して売るな」
こう彼等に言うのだった。
「残しておけ。そして耕してくれ」
「耕す」
「あの田畑を」
「あれはわしの全てだ」
首を動かす元気ももうなかった。ただ上を見上げているだけである。そのままで自分の子供達に対して語り続けるのであった。
「だからだ。残しておいてくれ」
「・・・・・・・・・」
子供達は今は誰も答えなかった。既にその考えは決まっているからだ。しかしそれを言うことはできなかった。言うにはあまりにも後ろめたかったからである。
「田畑をな」
子供達はやはり答えなかった。賢作はそのまま息を引き取った。それから暫くして彼の子供達は家にスーツの如何にも真面目そうな男を呼んだのだった。
「それではこの田畑をですね」
「はい」
「そうです」
彼等はこう言ってそのスーツの男に説明するのだった。今彼等は外に出てそのうえでスーツの男に対して色々と説明していた。
「この田畑を全部です」
「売りたいんですけれど」

「広いですね」
男はその田畑を見回してまずはこう言った。
「売ればかなりのものになりますよ」
「そんなにですか」
「ええ。それにです」
男はさらに彼等に話すのだった。
「場所もいいですしね。色々と買い手が見つかると思いますよ」
「だったら兄貴」
「売りましょう」
「そうよ。どうせ耕す人もいないんだし」
弟や妹達が長兄と思われる一番年配の男に話していた。
「それでいいじゃないか」
「高く売れるみたいだし」
「そうしましょう」
「そうだな」
そして彼もそれに頷くのだった。
「それがいいな」
「そうそう」
「じゃあそれで決まりね」
「よし」
彼等はこれで話を決めたのだった。
「じゃあどれ位で売られますか？」
「そうですね。どれ位で売れるかですが」
「これ位になると思いますが」
男はここで電卓を取り出した。そうして簡単に計算したうえでその額を彼等に見せるのだった。電卓に出たその額をである。
「如何でしょうか」
「えっ、それだけで売れるんですか！？」
「本当に！？」
その額は彼等をして驚かせるのに充分であった。そこまでの額だ

ったんである。
「そんなにですか」
「そんなに高く」
「ですから場所もいいですし広いですし」
条件は複数あるのだった。
「ですからこれ位はいきますよ」
「じゃあこれで決まりじゃないか」
「そうよ。こんな値段で売れるんだったら」
「本当に。買いましょう」
「わかった」
また弟や妹達の言葉に頷く長兄だった。
「それでは売るという前提で」
「はい」
長兄の言葉ににこやかな顔で頷くスーツの男だった。
「話を進めていきましょう」
「ではそういうことで」
「しかし」
だがここでこのスーツの男は。不意に少しばかり残念な顔も見せるのだった。それが何故かというと。
「勿体無い気もしますが」
「勿体無いですか」
「いい田畑ですから」
だからだというのである。

第三章

「売るには。勿体無いような」
「いえ、それはですね」
「ええ」
彼等はさらに彼の言葉を聞くのだった。そしてそのうえで言うのだった。
「こちらにも事情がありますから」
「それで」
「そうですね。まあこれは私がそう思っただけで」
男もそれ以上は言おうとしなかったのだった。あえてという感じだったが。
「言いませんね。もう」
「ええ。そういうことで」
「それじゃあ契約書とかは」
「それは少しお待ち下さい」
こう彼等に告げるのだった。
「これから作りますので」
「そうですか」
「それからですか」
「はい、暫くお待ち下さい」
こう彼等に告げたのだった。
「暫く」
「わかりました。それじゃあ」
「それで」
「ではまたお伺いします」
こう言って今回は帰るというのだった。
「そういうことで」
「それではまた」

「いらして下さい」
こうしてまずは売る話を進めだした。息子や娘達はその日は比較的落ち着いて家にいた。だがその夜のことだった。
四人でビールを飲んでこれからのことを自分達でも話しているとだった。ここで外から。
「売るな」
こう聞こえてきたのである。
「売るな」
「売るな？」
「誰か何か言ったか？」
「いいえ」
誰もがこの問いに首を横に振った。
「そんなの誰も」
「言ってないけれど」
「私もよ」
誰も言っていないというのだった。
「そんな。売るななんて」
「一体何を？」
彼等のうちの誰もが首を傾げさせる。だがここでまた聞こえたのだった。
「売るな」
まただった。
「売るな」
外から聞こえてくる。今度は聞き間違えようがなかった。
「外からだよな」
「ああ」
「それも田畑の方から」
「誰かいるのかしら」
怪訝な顔を顔を見合わせて言い合いだした。
「こんな時間に誰が？」

「しかも何を売るなっていうの？」
「まさかそれって」
まさかと思った。その時だった。
「田を売るな」
「また聞こえた！？」
「ああ、そうだな」
「間違いないわよ」
今度は間違えようのないものだった。誰もが確かに聞いた。
「しかもこの声って」
「けれどそれって」
「有り得ないわよ」
続いてその声を思い出してだった。口々に言うのだった。
「親父の声って」
「何で親父の声が聞こえるんだよ」
「それも外から」
「何でよ」
彼等は次第にその身体を震えさせていた。そのうえであれこれ言い合う。しかしそれでもだった。彼等はここで自分達の外側を見るのだった。
「外にいるみたいだな」
「どうする？」
「どうするって言われても」
「どうしようっていうのよ」
震える顔で言い合うが何もできなかった。何が何なのかわからないからだ。それで何かできる程彼等も気が強くはなかったのだ。

第四章

「田畑の方から聞こえてきてるよな」
「ああ、親父の声な」
「確かにね」
また言い合うことだけしかできなかった。
「どうする？それじゃあ」
「外に出るっていうのか？」
「まさか確かめるの？」
「誰がいるのか」
「確かめないと駄目だろ」
長男が言った。
「あれは親父の声だぞ。間違いない」
「けれどよ。親父は死んだじゃないかよ」
次男がそれに言い返す。
「それで何で外からよ」
「けれどあの声は間違いないわ」
「そうよ。お父さんのよ」
長女と次女はそれぞれこう言った。
「あの声。聞き間違えようがないわよ」
「絶対にそうよ」
「だからだ。言ってみるんだ」
長男はあらためて弟と妹達に告げた。
「そして確かめるんだ。いいな」
「幽霊かも知れないのにか」
「出てるのかも知れないのに？」
「だから幽霊かどうか確かめるんだよ」
長男の言葉は強いものになった。
「いいな。行くぞ」

「わかったよ。それじゃあよ」
「行けばいいんでしょ、行けば」
こうして兄弟全員で外に出ることにした。めいめい懐中電灯を手にその光を頼りに田畑の方に向かう。そこは暗く月も星もない。まさに電灯だけが頼りだった。
声も今は聞こえない。急に聞こえなくなった。だが彼等はこのことにかえって不気味さを覚えているのだった。安心してはいなかった。
「いない？」
「誰もいないわ」
「田んぼにも畑にも」
辺りを電灯の光で照らしながら言うのだった。
「何処にもな」
「いないわよ」
「いや、安心するな」
だが長男は警戒する声で弟や妹達に告げた。
「御前達も声は聞いてるな」
「ああ」
「それはそうだけれど」
「じゃあ安心するな」
あくまでこう言うのだった。
「絶対にな」
「けれど何も見えないぜ」
「声も止んだし」
「いや、絶対にいる」
長男の言葉は確信のものだった。
「絶対にな」
「いるって言ってもよ」
「何処なのよ」
「そうよ、何処にいるのよ」

何がいるのかさえわからない。その恐怖の中にいた。ここでその彼等の後ろからだった。またあの声が聞こえてきたのであった。
「売るな」
「！？」
「後ろから！？」
すぐ後ろからその声を聞いてだった。
「聞こえたぞ、おい」
「あ、ああ」
「まさか・・・・・・」
そう思い後ろを振り向いた。その時だった。
「売るな！」
声は賢作の声だった。だがその姿は黒く不気味なものだった。
泥だった。泥でできた人間だった。その目は片方がなくしかも指が三本しかない。その異形の化け物が今賢作の声を出してきたのだ。
「売るな！」
「な、何だこいつは！」
「化け物！」
その姿を見て慌てて逃げ出す一同だった。そうしてその日はそのまま逃げる。しかしだった。

第五章

声はその日ずっと続いていた。終わることはない。朝まで続き彼等は一睡もできなかった。そうして次の日彼等は檀家に行きこのことを話したのだった。

するとその檀家の住職は。難しい顔をしてそのうえで言うのだった。それは。

「それは泥田坊ですな」

「泥田坊といいますと」

「幽霊ではないのですか」

「また違うものです」

住職はこう彼等に話した。

「近いものですが違います」

「違うというと一体」

「どんなものですか？」

「その人の執念、この場合は田畑への執念がそのまま残ったもので」

それだというのである。

「それがなったものなのです」

「はあ」

「じゃああれはやっぱり親父ですか」

「賢作さんなのは間違いないです」

それは確かだというのである。

「そうした意味で霊に近いのですが」

「そうでもないと」

「ええ。あくまで田畑を売られたくないという賢作さんの執念」

またこう言われるのだった。

「それなのです」

「親父の執念」

「あれがその化け物」

「妖怪と言うべきですな」
住職は彼等に対してこう告げた。
「泥田坊は」
「妖怪ですか」
「左様です。それでです」
そして住職はさらに彼等に話すのだった。
「泥田坊を何とかするにはです」
「ええ」
「どうすればいいんですか？それは」
「田畑を売らないことです」
それだというのである。
「売るなと言っておられるのですよね」
「はい、そうです」
「その通りです」
彼等は住職のその言葉にすぐに答えた。
「それがもうおっかなくて」
「どうしたらいいかと思いまして」
それで来たのである。だからこれは当然のことだった。
「それで売るなですか」
「あの田畑を」
「若し売ればです」
住職の言葉は険しいものになった。その険しい言葉でさらに言ってきたのだ。
「恐らく祟りを起こすでしょう」
「祟りをですか」
「お父さんの祟り・・・・・・」
「泥田坊は執念でできたものです」
またこのことを話す。
「だからです。売ればその時こそ恐ろしいことが起こります」
「それじゃあやっぱり」

「売っては」
「なりません」
今度は一言であった。
「売ればその時こそどうなるかわかりませんぞ」
「左様ですか。それでは」
「兄貴、やっぱりここは」
「もう一度考えましょう」
「そうしましょう」
彼等は困り果てた顔を見合わせてそのうえで言い合うのだった。
もうそれは彼等の中では既に答えが出ている様子であった。
「祟りは怖いし」
「そこまで親父が思っているなら」
「やっぱりね」
「売らないでおきましょう」
「それが一番いいです」
住職はその四人に対して告げた。
「祟りを受けたくなければ」
「はい」
「わかりました」
こうして四人はその田畑を売らないことにした。その旨はすぐに業者にも伝えたのだった。
「そうですか。売りませんか」
「すいません、話が変わりまして」
「それで」
四人はこうその業者であるあのスーツの男に告げていた。今彼等は家の外の田畑の傍にいてそれを見ながら話をしていた。
「申し訳ありませんが」
「それで宜しいでしょうか」
「ええ、私は構いませんよ」
業者はにこりと笑って彼等に答えるのだった。

「むしろですね」
「むしろ？」
「売らないと御聞きしてほっとしています」
こう彼等に話すのであった。
「それで」
「売らないで、ですか」
「ですがそれが貴方のお仕事では」
「それはそうですけれどね」
このことは認識しているという言葉であった。だがそこにはプラスアルファもあった。
「ですがこれだけの見事な田畑を潰すというのもこれまた」
「勿体ないというのですね」
「その通りです。だからです」
業者は言うのだった。
「潰さなくて済んでほっとしているのですよ」
「そうだったんですか」
「それでですか」
「ええ。本当に立派ですね」
あらためてその田畑を見回しての言葉だった。
「大事にして下さいね」
「あっ、はい」
「わかりました」
彼等は業者の今の言葉に気付いたような顔で頷いた。
「それじゃあこれからは」
「この田畑を」
「そうして下さい。貴方達のお父さんは素晴らしいものを残されましたね」
業者の顔はさらににこりとしたものになっている。
「是非。このまま残されて下さいね」
「ええ。それじゃあ」

「そのように」

四人は彼の言葉にまた頷いた。これで話は終わりだった。賢作の田畑は残され四人は何とかこの田畑を残し耕し続けた。それから泥田坊が姿を現わすことはなくなった。おそらく田畑が残って安心したのだろう。少なくともこの田畑は残ったのであった。

泥田坊　　完

２００９・８・２３

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5030i/

泥田坊

2010年10月8日15時36分発行